

実験を行った。特に後者については同一材料について幅広い水素暴露条件の試験を行った。それから統一的に水素侵食限の推定を行いその結果は、APIにおいて最近の Nelson 線図改訂に貢献した。水素脆化は  $K_{IH}$  によりその安定性を評価されるが、測定法や得られる  $K_{IH}$  の値がまちまちである。当委員会では、熱処理で強度を変えた  $2\frac{1}{4}$  Cr-1 Mo 鋼について、どの様な試験法であれ水素亀裂の進展をマイクロで調べると、従来の常識とは異なって  $K_{IH}$  の強度依存性が小さいことを見いだした。非破壊試験専門委員会

極厚板の圧力容器の健全性を非破壊的に試験する超音波探傷試験において、欠陥の検出及び欠陥の評価結果にばらつきがある。

当委員会では、欠陥の評価を行うための能力の高い試験方法を国際的に統一すべく、下記の試験を行った。米

国 PVRC から提供された圧力容器胴及びノズル溶接部のモックアップを使用して、溶接部の超音波探傷を実施した。その結果とその後の破壊試験による欠陥の確認結果を比較して試験方法の能力を評価した。一方同様な試験体の作成に協力し、これらを用いて行われた国際協力研究 (OECD NEA プロジェクト PISC 計画) に参加し、同じく試験方法の能力評価を行った。これらの成果から ASME 規格の改正が行われ、また ASME 規格に対応する日本の規格の変更が検討されている。

尚、これらの成果は圧力容器の信頼性シンポジウム (59 年 10 月, 61 年 9 月) で発表。さらに PVRC, PISC, API に報告を行い、国際的な評価を得ており、今後も API, WRC の Bulletin として順次発刊される。(既刊: API Bulletin Vol. 65, WRC Bulletin No. 331)

## 編集後記

編集委員の任期中最後の編集後記を書く番が回ってきました。毎号編集委員の立場からお書きになる方が多いので、今回は視点を変えて論文の投稿者、かつ会員としては少数派の大学人の立場を混せて日頃感じていることを述べさせていただきます。

御存じのように本誌は研究論文を掲載するという学術誌の機能と、解説記事等を通じて会員に新しい情報を伝えるという会報の機能を兼ね備えております。そのうち大学人として前者の機能に関心が強い理由の一つに、大学での昇進が査読のある学会誌に掲載された論文数に大きく影響されるという現実が挙げられます。つまり論文の掲載によつて著者自身が大きなメリットを受けるわけです。一研究論文の平均読者がわずかに 3 人という他誌の統計が本誌に当てはまるとすれば、読者よりも著者の受けるメリットの方が大きいことがわかりただけだと思います。このような現状では皮肉にも本誌が大学からの投稿者に最も大きく貢献しているといえましょう。

本誌の編集委員会は投稿者に対し過剰、時には互助

的といつてもよいぐらいの至れりつくせりのサービスをしております。このため投稿者が編集委員会の意見を受け入れなければ、掲載が遅れるという消極的な理由で妥協することも、私自身の経験を含めて起こるわけです。査読者が論文執筆の指導者でないことを考えれば、この傾向は学術論文の発行上健全なものではないと思います。本質的なことだけを厳しく指摘して、文章が稚拙かどうかは著者の責任とする、もう少しつき離れた対応が必要なのではないでしょうか。つまり表現よりも内容が審査されるべきと考えます。その意味で、ほとんどすべての投稿論文が掲載されるのは不思議な気さえます。この辺が、本誌が純粋な学術誌ではない限界かも知れません。

現在本誌が世界の一流誌であることは否定致しません。しかし、ますます磨きをかけて、掲載されるだけで名誉と誰もが認めるような超一流誌になるよう、本誌を皆で育てていきたいものと思います。

以上、自省をこめて本年第一号の編集後記とさせていただきます。(N.S.)